

南大萱の小字についての聞き取り調査

龍谷大学理工学部・実験助手 里山学研究センター・研究員
林 珠乃

1. はじめに

地名にはその土地が経てきた人の歴史・自然の歴史が秘められている。地名を構成する漢字やその読み方から、その場所の起伏や水の流れといった自然条件の特徴を読み取ることができ、人と自然が互いに関係することで出来上がった“その土地らしさ”を紐解く糸口となる。しかしながら、近年の都市化に伴って区画整理が進行し、古い地名が失われる傾向がある。本研究では、滋賀県大津市南大萱地区を対象に、地区内の小字の特徴や思い出を聞き取り、記録することを目的に調査を行った。さらに、聞き取り調査によって把握した小字の特徴と小字の空間的な配置を組み合わせて立体的に読み解くことで、この地域の“景観”を理解することを目指す。

琵琶湖南湖の南東岸に位置する滋賀県大津市南大萱地区は、琵琶湖と瀬田丘陵の自然に依存した営みが続いてきた地域である。江戸期には“大萱村”として膳所藩の所領であった地区であり、現在の瀬田北学区と瀬田東学区が合わさった地域におおよそ等しい。明治7（1874）年に現草津市の同名の村と区別するために“南大萱”と改称される以前は、“大萱（村）”と呼ばれていた。大萱という地名の由来には諸説ある。『近江栗太郡志』には、萱の野原が広がっていたことにちなむという説、奈良時代の地方官庁である「大衙屋」や、大寺院を意味する「大瓦屋」があった場所でありその当て字として大萱が使われたという説が述べられている。

2. 聞き取り対象者

南大萱資料室に所属し南大萱に在住する以下の各氏に聞き取りを行った。

- MSさん：男性。昭和5年南大萱宮ノ口生まれ、昭和45年以降南大萱北出に在住。
- TMさん：男性。昭和11年南大萱一里山生まれ、昭和40年から南大萱新朝倉に在住。
- HRさん：男性。昭和9年南大萱姥田生まれ、昭和41年から南大萱宮ノ口に在住。
- FTさん：男性。昭和13年南大萱宮ノ口生まれ、昭和63年から南大萱織部に在住。
- SYさん：男性。昭和23年南大萱正林坊生まれ、同地に在住。
- KGさん：男性。昭和9年大阪府生まれ、昭和54年から南大萱浜口に在住。
- FHさん：男性。昭和17年滋賀県今津生まれ、昭和61年から南大萱鬼入に在住。
- YYさん：男性。昭和15年京都府生まれ、昭和35年から南大萱椋井に在住。
- YKさん：女性。昭和8年南大萱北出生まれ、昭和46年から南大萱北出に在住。
- OSさん：女性。昭和8年南大萱浜口生まれ、現在は南大萱西浦に在住。

- HTさん：女性。昭和8年南大萱宮ノ口生まれ、以降同地に在住。
- UKさん：女性。昭和8年大津市大江生まれ、以降同地に在住。

3. 調査日時

調査は、2015年12月から2016年2月までの期間に南大萱資料室（滋賀県大津市大萱2丁目18-13）で行った。出席者は以下の通りである。

- 2015年12月11日：惣夙・北川尻・殿田・井関・南川崎・南川尻・小葎・蓮原・広葎・草川・田葎・鬼入・奈良田の聞き取り、参加者はMS・TM・HY・HR・KG・FHの各氏
- 2015年12月22日：穴田・菖蒲・針田・四ノ坪・五ノ坪・七ノ坪・四田原・銚子・野入・井戸・野々宮・烏子・三条ヶ町・山田・広野・山崎・姥田・浜口・織部・西浦・野海道・正林坊の聞き取り、参加者はMS・TM・FT・SY・KG・FH・YGの各氏
- 2016年1月7日：茶屋窪・一ツ松・古朝倉・堂山・河原・増井についての聞き取り、参加者はMS・TM・SY・HR・KG・FH・YGの各氏
- 2016年1月14日：焼野・新朝倉・新林・長尾・茶屋前・丸尾・四反田・山ノ神・往還浦・赤兀・南野・西野・東野についての聞き取り、参加者はMS・TM・SY・HR・FT・KG・FH・YGの各氏
- 2016年1月18日：本願明・広畑・椋井・石拾の内についての聞き取り、参加者はMS・TM・SY・HR・FT・KG・FH・YG・HT・YKの各氏
- 2016年1月18日：本願明・広畑・椋井・石拾の内についての聞き取り、参加者はMS・TM・SY・HR・FT・KG・FH・YG・HT・YKの各氏
- 2016年2月2日：南大萱全般についての聞き取り、参加者はHT・OS・YK・UK・KGの各氏

4. 成果の発表

本調査で実施した聞き取り調査によって、南大萱地区の小字にはその場所の地形や在所からの距離等の空間的な配置を反映した固有の特徴があり、特徴を反映した土地利用が行われていたことが明らかになった。このような物理的条件に基づく特徴は、単に土地利用や建築物といった目に見えるものの存在に影響を及ぼすだけでなく、そこで起こった事柄や人々との繋がりと結合し、住民の意識に深く根を下ろしていることがわかった。このような、目に見える/目に見えない土地の特徴の基礎となる地形等の物理的な条件は、近代の高度に発達した土木技術によって容易に改変され均質化される傾向があるが、その潜在性は失われるものではない。今後の地域計画のためにも、今回の聞き取り調査で得られた情報を形に残し、地域の人々がアクセスできるようにすることが大切だと考えた。

そこで、本調査の要約は、2017年7月に南大萱資料室と里山学研究センターが発行した「南大萱の地名 明治期南大萱村小字境界図」に小字の解説として掲載した。

<http://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/6768a05fe6f6c81c8fa96fcae07111f2884010f1.pdf>

<http://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/d3442a88af40e053cc8183680784b824a8349d61.pdf>

また、Google Mapを利用して本資料のWeb-GIS版を公開した。



<https://goo.gl/QYA2VU>

5. 各小字について

聞き取り調査で得られた、各小字の表記と呼び方、小字にまつわることは以下の通りである。「南大萱の地名 明治期南大萱村小字境界図」で各小字に降られた番号の順に記述する。

1. 本願明「ほんがめ」(主にMS・FT・SY)

- 本願名と書く場合がある。
- 長沢川を水源とする本願明池がある。
- 昭和50年に本願明池は埋め立てられ、長沢川の水を排水するポンプが付けられた。ポンプの水の勢いを弱めるために池の一部を埋め立てずに三角形の形に残した。
- 本願明池の横には伝九郎さんの藪があった。現在の自転車屋と駐輪場の間のあたりに当たる場所である。藪はだんだんと池の方向に拡大していった。
- 線路には二か所踏切があった。現在の駅舎がある場所と現在の萱野神社の大鳥居の南側の赤元踏切である。本願明にも非公式に線路を横断する場所があった。
- 本願明の線路の渡しは、見通しが悪く、人身事故が多かった。
- 神社の藪がうっそうとしていて怖かった。
- 非公式ではあったが、春の神輿の渡御の際には通行するルート(神輿道)であった。
- ながいり(元服)を済ませた男子が神輿道を整備した。
- 神輿はかなり細い道も通った。そのような細い道では、神輿を片腰で担いだ。
- 細い道の脇の田畑は、神輿が通る際にあらされる場合もあったが、田畑の持ち主は文句を言わなかった。
- 時期的に、春の祭の頃には畑には麦が植えられていた。
- 本願明の池では、池床入札が行われた。池床入札とは、毎年12月に行われる池での養殖権の競りのことである。京都の大覚寺でも行われる。

2. 東野「ひがしの」

- 東野の半分近くは、萱野神社の森や田畑だった。(SY)
- 東野の田地は、山側の溜池を源とする水路の末端にあるため、村の中でも最も水を確保しにくい、耕作に不適な場所だった。(MS)
- 150年ほど前は荒地だったが、村で開墾し、当時あった130戸に農地を分配した、という文書が村に残っている。(MS)
- その後、村内で転売されていった。(MS)
- 縄の会社や鉄工所があった。縄の会社には稲わらを持って行って縄をなってもらった。(FT)
- 西野・南野・東野のあたりは農業に向いていない土地で、神社や墓があり、さみしい雰囲気のところだった。(MS)

3. 南野「みなみの」

- 赤元から南野の方向はゆるやかな下り坂だった。(TM)

- 石拾池からの長尾と朝倉の二方向に水路が伸びていた。朝倉側の水路は、朝倉道からダイエー瀬田店の駐車場の所を通過して、西野と南野の境のところまで通じており、「よみぞ」と呼んでいた。(FT)
 - この水路と国道一号線が交差する箇所では、U字溝のサイフォンで水路の水を渡していた。サイフォンの入りと出の口はくぼんで水が溜まるようになっていた。それを「どんど」と呼んでいた。(FT)
4. 西野「にしの」
- 西野には南大萱の墓地がある。
 - 一里山の人たちは、赤兀道で赤兀踏切の手前まで行き、そこから墓まで伸びる墓道を伝えて墓に行った。(TM)
 - 宮ノ口などに住む人々は、また別の墓道を使って墓に行った。(SY)
 - 家によって、葬式や婚礼の際に辿る道が決まっていた。(TM・SY)
5. 野海道「のかいどう」
- 現東光寺の敷地周辺は、古くより寺院跡として認識されており、7世紀頃の瓦やカットグラスが出土した東光寺遺跡がある。
6. 正林坊「しょうりんぼう」
- 野海道や正林坊のあたりは、東光寺の寺域だった。東レが出来てから、村外から来た人や大萱の人の一部が住み始めた (MS)。
 - 正林坊の一部には、「東光寺屋敷」と呼ばれる場所がある (MS)。
 - 正林坊池は蓮の花の咲く池だった。萱野神社の湧水を引いていた (SY)。
 - 江戸期までは、南大萱には4つか5つの在所があった。今の野海道にあたる場所は、在所に含まれない、いわゆる番外地であり、年貢を払えなくなり破産した村人が住むような場所だった。これらの場所の屋敷の敷地は、在所のものよりも狭い (MS)。
 - 文政10年の名寄帳では、南大萱は上出「かみで」宮ノ口「みやのくち」北出「きたで」浜口「はまくち」大道「だいどう」の5在所から成っている (MS)。
7. 宮ノ口「みやのくち」
8. 北出「きたで」
- 北出・浜口・宮ノ口などのエリアは、「おおがい」と呼んでいた。(HT)
 - 東山道沿いのエリアを“大町（おおまち）”と呼んでいた。(OS・HY・YK)
 - 大町は、地主や本家が住む場所だった。(YK)
 - 北出のだんぎゃや東光寺屋敷などは、大町よりも格が低く、分家が多く住む場所だった。このイメージは40-50年前のものである。(YK)
 - 高等女学校の入学式での入学者の母親の装いについて、大町の人は紋付、その他の場所に住む人は紋付でなくても良い、という話をしているのを聞いた。家の格式が場所によって決まっていた。(YK)
9. 広畑「ひろはた」
10. 椋井「むくい」
- 昭和になってから、椋井のあたりに民家が建ちはじめた。
 - 長沢川の天井川の天井から椋井川にかけて急斜面になっていた。
 - 斜面は雑木や竹が生い茂る藪になっていて、その斜面を「むくい山」と呼んでいた。(HT)

- 子供の頃、むくい山に行くと狐に騙されると言われていた。
- 長沢川の堤防は、南側（椋井側）の堤防のほうが厚かった。
- 堤防の上には道がついており、リヤカーが通ることができた。
- 道は、藤ヶ森までは北側の堤防の上を、藤ヶ森より下流側は南側の堤防の上に通っていた。
- 昭和50年頃ボーイスカウトの子供たちが長沢川に桜を植え、現在では桜並木になっている。
- 長沢川は自衛隊が整備した→南大萱史に記載
- 線路に釘を置いて釘を平たくして遊んだ。平たくした釘を小刀に加工した。平たくなった直後の釘は熱を持って熱かった。釘を平たくするには、客車よりも貨物列車のほうが都合がよかった。(MS・SY・FT)

11. 山崎「やまざき」

- 浜街道と長沢川が交差する場所（現在の大萱3丁目交差点）を「山崎」と呼んでいた。(MS)
- 「山崎」には鬱蒼とした藪が茂っていた。北東側には宜秋門院丹後の塚跡の石碑や力士の墓があった。(MS)
- 天井川であった長沢川の堤防は、集落に面する南側の堤防の方が農地に面する北側の堤防より高かった。「山崎」のあたりでは、南側の堤防の傾斜は急で堤防の幅はそれほどなかったが、北側の堤防は緩傾斜で50mほどの幅があって広場のような使われ方もしていた。(MS)
- 「山崎」では、戦前に映画のロケがよく行われていた。南大萱の人々はエキストラとして出演していた。(MS)
- 南大萱にサーカスが来た折には、「山崎」に小屋が掛けられた。(MS)

12. 姥田「おばた」

- 姥田と書いて「おばた」と呼ぶ。姥田川が流れている。古文書では、「おばた」とかな表記されている場合もある。

13. 浜口「はまぐち」

- 大萱の浜（現在の貴船神社がある所）があった小字である。大萱の浜は、大萱の湖側の入り口であり交通の要所であった。年貢米を対岸の膳所や大津に出す場所であった (MS)。
- 常夜灯があった。常夜灯より湖側は浸水するので、家は一軒も建っていなかった (MS)。
- 浜口には膳所藩の札場跡がある。浜口は大萱の玄関にあたり人の集まる場所だった (KG)。
- 船着場の両側には、倉庫のような古い建物があった (MS)。
- 船着場までの道は広かった。船着場より先は水路で船を使って行き来していたので、道はあったとしても細かった (SY)。
- 明治期の湖面は今より数十cm低かった (YY)。

14. 西浦「にしうら」

- 戦前はほとんど家が建っていなかった。昭和12～13年に東レが出来てから家が建ち始めた (MS)。
- それまでは、織部や西浦のあたりは、K一族だけが住んでいた。K家は天保年間に美濃のあたりから大萱に移り住んで瓦焼を生業としてきた一族である (KG)。

15. 織部「おりべ」

- 織部高山古墳がある。三角縁神獣鏡が出土した。

- 瓦屋さんがあって、周辺の土をとって瓦を焼いていた。
- 浜街道が昭和11年、東レ瀬田工場が昭和12～13年にできたが、織部や西浦の土をとって東レ瀬田工場の整地をした（MS）。

16. 草川「くさがわ」

- 「草川」「広葭」「田葭」「蓮原」「小葭」辺りには、膝や腰のあたりまで水に浸かるような、水量の多い水田があった。（MS）
- 草川の南側は隣村の大江の地先であり、東レの農場があった。その農場に飛行機がよく不時着していた。（MS）

17. 広葭「ひろよし」

- 広葭の水田地帯には、「代官堀（だいかんぼり）」と呼ばれる水路が張り巡らされている（KG）。
- 広葭では、天保5年頃江戸の町人大久保貞之助によって新田が開発された（大久保新田）といわれている（KG）。

注）南大萱資料室に保管されている大久保新田に関する古文書「近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳（天保6（1835）年）および近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳（天保5（1834）年）に記載されている地名は、小葭・中葭・南葭・老松・高砂であり、広葭の名はない。

- 代官堀は、田船の通る水路として整備されたと思われる（MS）。
- 田船に牛を載せて運んでいた。大萱で飼われている農耕用の牛はメス牛が多かった（MS）。
- 代官堀を行き交っていた田船は、大萱の浜に係留されていたものよりも小型であった（MS）。
- 大萱浜に係留されている田船は、対岸の大津等への湖上交通に用いるものであり、大型であった。大津から金肥を南大萱に運ぶ役割などを果たしていた（MS）。

18. 田葭「たよし」

- 角川地名大辞典には、田葭には「浮田」という地名があったと記載されている（参考資料：角川地名大辞典）。
- 田葭を含む湖岸近くの水田は、膝や腰まで水につかるような、水量の多い水田だった（MS）。
- 「浮田」というのは、水路で行き来するような、水に浸かりやすい水田があった場所なのではないだろうか（MS・KG）。

19. 蓮原「はすはら」

20. 鬼入「おにで」

- 読みについて、「おにで」と読む場合と、「おにいり」とする場合がある（KG）。
- 地元に昔から住んできた人たちは、10人中8・9人が「おにで」と呼ぶ（FH）。
- 角川地名大辞典では、鬼入に「おにいり」とルビが振ってある（参考資料：角川地名大辞典）。
- 鬼入のあたりの橋には、「おにいり2号橋」と表記されている（FH）。
- 大萱の中心から見ると北の方角に位置し、鬼門に当たるから「鬼入」となったのではないか（MS）。

21. 奈良田「ならだ」

- 奈良田には条理田のような同形の田が並んでいたが、四ノ坪などの田よりサイズが小さく、四ノ坪等とは雰囲気は違っていた。
- 聖武天皇が東大寺の荘園にした場所が南大萱のあたりにある、という言い伝えがある(KG)。

22. 南川尻「(みなみ)かわじり」

- 南川尻と北川尻を併せて「かわじり」と呼んでいた。堤防が決壊しやすく、絶えず水害を被るので、水田稲作が難しい場所だった。(MS)

23. 小葭「こよし」

- 湖岸は石積みでありヨシが生えていた (MS)。
- 夜中に石積みの石を沖に少しづつ移動して田地を広げていった (MS)。
- 湖岸の開発は古くから行われていた。天保5 (1834) 年頃、南大萱の湖岸を江戸町人大久保貞之助が開発した大久保新田についての古文書は、南大萱資料室に保管されている (天保五年近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳、天保六年近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳、いずれも南大萱資料室蔵)。
- 南大萱資料室に保管されている以下の新田開発に関する古文書には、北惣鯨・北川尻・南川尻・いせき・小葭・蓮原・草川・田葭の湖岸にある小字で田畑の開発を行った記録が残っている。

新開検地反別帳 (天明 (1787) 年)

江州栗太郡大萱村新田改帳 (嘉永7 (1854) 年)

近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳 (天保6 (1835) 年)

近江国栗太郡大萱村地先大久保新田検地帳 (天保5 (1834) 年)

近江国栗太郡大萱村新田検地帳 (天保5 (1834) 年)

近江国栗太郡大萱村新田検地帳 (天保5 (1834) 年)

江州栗太郡大萱村新田畑改帳 (宝永元 (1704) 年)

新田畑改帳 (正徳3 (1713) 年)

田畑検地 (元文3 (1738) 年)

東野新畑検地帳 (元文5 (1740) 年)

24. 南川崎「(みなみ)かわさき」

- 長沢川の河口に位置する小字である。(MS)
- 長沢川は、「ながそがわ」と呼ばれる。江戸時代、村で流行病が蔓延した際に行われた「病送り」では、病魔は川崎に送られた。(MS)

25. 惣鯨「そえり」

- 元は琵琶湖沿岸のヨシ帯を埋め立てて水田にした場所だろう。(MS)
- 「鯨」とは、琵琶湖一帯で行われている「鯨漁」を行うために設置する小型定置網のことである (参考資料：琵琶湖ハンドブックp91-92)。
- 川を遡上した魚を狙っているため、河口の両岸の沖合に設置していた。(MS)
- 南大萱の鯨は南川崎沖・小葭沖・広葭沖に設置された3統あり、すべて個人が所有しているものだった。(MS)
- その他に、現在のアヤハディオ瀬田店の沖あたりに大江の鯨が、近江大橋の東詰南側にも

魷があった。(MS)

- 南大萱の魷は、北湖に設置されている魷と比べると小規模であり、せいぜい全長100mほどであった。(MS)

26. 北川尻「(きた)かわじり」

- 北川尻と南川尻を併せて「かわじり」と呼んでおり、あまり区別していなかった。(MS・TM)
- 堤防が決壊しやすく、絶えず水害を被るので、水田稲作が難しい場所だった。(MS)
- 元は、「川尻」が河口であって、その後河口が発達するにしたがって出来た土地が「川崎」なのではないか。(MS)

27. 殿田「とのだ」

- 殿田川が流れている (参考資料：路と川)。
- 殿田川では「待ち網」という方法の魚つかみをした。(TM・MS・HR) (参考資料：南大萱史)
- 「待ち網」とは、大雨時の増水の後に流下する魚を狙った漁法である、河道を塞ぐほど大きな、タモ網のような形の「待ち網」を川に差し入れて魚を捕えた。(TM・MS・HR)
- 殿田川では、漁業権を持たない人でも「待ち網」漁をすることができたので、一里山の住民も南大萱以外の人たちも参加した。(TM・MS・HR)
- 昭和の頃は、村外から待ち網漁をする人が多く訪れ、それらの人々の車が農道に多く停まっていた。(MS)
- 「待ち網」漁をした場所は、殿田川が芦浦道と交差するあたりからイオン草津東側の交差点のあたりまでである。(TM・MS・HR)
- イオン草津東側の交差点より西側は、川幅が広がるため待ち網漁には適していない。(TM・MS・HR)
- 一定の間隔で網を持った人が並んで、殿田川に網を差し入れていた (TM・MS・HR)。
- 上流で網を入れる方がより魚が取れるというわけではなく、下流側であっても上流と同じ程度の漁獲があった。(MS)
- フナやコイなどの大型の魚種を狙った漁であった。(TM・MS・HR)
- 待ち網をするためには大きな網が必要であり、そのような網を持たない大萱の子供たちは、殿田川ではなく自分たち家が持つ田の水路などで小魚を採っていた。(TM・MS・HR)
- 南大萱の中心を流れる長沢川は天井川になっており、水量が少なくあまり良い魚がいなかったため、待ち網漁はしなかった。(MS)

28. 井関「いせき」

29. 菖蒲「しょうぶ」

- 菖蒲が生えていたというわけではないが、穴田と同様に低い場所だった。(MS)
- 二輪駆動のトラクターで田を耕そうとしたら、田に水分が多いためトラクターの車輪が土にめり込んでしまい、動かなくなって困ったことがあった。(FT)
- 芦浦道と交差するあたりの殿田川には、幅50cmほどの石の橋が架かっていた。現在ではその橋は上酢子池のあたりに保存されている。(MS・FT)
- 橋の下手側には堰があり、水をせき止めていた。(MS)
- 干ばつの際に、琵琶湖の水を逆水するために水を堰き止める役割を果たしていた。(MS)

- 川の広いところには移動式の水車を設置して水を上流に組み上げていたが、細い水路は手桶（たおけ）で下手の水路から堰の上手に水をくみ上げ、それを繰り返して自分の田まで水を揚げていた。(MS)
- 昭和13年の干ばつの時はこのような人力の逆水作業に子供も加勢した。小学校2、3年生だった自分も、五ノ坪の田に琵琶湖から逆水したことを覚えている。(MS)
- 逆水の作業はまず始めに、村中総出で殿田の堰に水を組み入れる作業をする。堰が満たされると、堰に続く上手の水路に設置された堰に水を移し替えていく。このようにして水路を遡って水を揚げていく。(MS)
- 逆に、魚を採るために田の水をくみ出す「かいどり」をすることもあった。(MS)
- 一ツ松や下月輪池の下にも田があったが、これらの田はすぐ上手にため池がありそこからの引水が容易であったため、水が足りなくて困ることはなかった。逆に、代官堀近くの低地にあった田は、代官堀の水がなくなった際には引水できなくて困った記憶がある。(SY)

30. 穴田「あなだ」

- 芦浦街道と東山道、長沢川と狼川に挟まれたエリアの中で最も低い土地であるため、上手の土地で利用されたり溢れた水が溜まりやすく、腰まで水に漬かるような田であった。(MS)
- 下手の殿田のほうが高いところにあったため、田に水が溜まりやすい場所だった。(MS)

31. 針田「はりた」

- 「針田」「井戸」「小柵木」「七ノ坪」「戌ヶ町」「五ノ坪」「野入」「銚子」「四田原」「四ノ坪」には、8世紀中頃整備された条里田の区割りを維持した、間口10m、奥行100m、広さ一反の一定の形の田が、道と水路に沿って東西方向に並んでいた。

32. 井戸「いど」

- 条理田がある場所は、東山道と芦浦道の間、長沢川と狼川の間、酢子池よりも下のエリアである。
- 小字ごとに水系が決まっていた。
- 条理田への水は、上酢子池と下酢子池からの水路系で供給される。
- 上酢子池は湯ノ口「ゆうのいけ」、下酢子池は四ノ坪「しのつぼ」にある。
- 酢子池系統の田は、「四田原」・「銚子」・「四ノ坪」・「野入」・「五ノ坪」・「七ノ坪」・「井戸」・「穴田」である。
- 「大將軍」・「戌ヶ町」・「小柵木」・「針田」には、月輪池や山の神池系統の水路が、長沢川沿いの田は長沢川から水が供給されていた。

33. 小柵木「こひらぎ」

34. 七ノ坪「しちのつぼ」

35. 戌ヶ町「いぬがまち」

36. 五ノ坪「ごのつぼ」

37. 野入「のいり」

38. 銚子「ちょうし」

39. 四田原「しだわら」

40. 四ノ坪「しのつぼ」

41. 大將軍「だんじょご」

- 大將軍・河原は、長沢川沿いで配水の便が良いので水の心配がなく、米の収量が多い場所だった。耕作に適しているうえに在所からも近いので大萱の農地の中でも一等田がある場所だった。(MS)
- 長沢川沿いなので堤防が決壊すると水に浸かるが、洪水はせいぜい20年に一度起こる災害なので、そのデメリットを差し引いても良い場所だった。(MS)
- 河原・大將軍・北出・椋井の境界は藤ヶ森と呼ばれる場所で、藤ヶ森神社がある。(MS)
- 藤ヶ森神社は、もとは大將軍の田の中にあった祠だった。祠の周りには藤の木が植わっており、こんもりしていた。(MS)
- その藤ノ木の蔓にぶら下がってターザンごっこをした。(MS)
- 長沢川には藤ヶ森橋がかかっていた。(MS)
- 大將軍あたりから藤ヶ森橋の方向を展望した写真が残っているが、天井川を超えるための坂が写っている。長沢川を越えるためには、高低差5mほどの坂を昇り降りする必要がある。(MS)
- 荷物を載せたりヤカーを引いてこの坂を超えるのは大変だった。(SY)
- 瀬田北幼稚園を建設するにあたって事前に発掘調査を行ったら、長沢川の氾濫によって堆積した砂礫の層が1.5mもあったという話である。(FH)

42. 河原「かわら」

43. 増井「ますい」

- 田の等級は河原や大將軍より下だった。(MS)
- 河原から増井にかけてのエリアには、梅雨の頃ゲンジボタルが多く出たので、皆で蛍狩りにいった。(MS)
- ホタルは長沢川の堤防の下にでた。おそらく増井川で育ったものだっただろう。(MS)
- 長沢川には常時水があるわけではないので、カワニナがいなかった。一方で、増井川にはカワニナがいた。(MS)
- ホタルを捕まえて蚊帳に入れた。(MS)
- ホタルからは独特なおいがした。(KG)
- ナタネの木を蛍狩りに使った。種を採った後のナタネを、薪にするために集めておいた。それをナタネの木と呼んでいた。(MS)
- ナタネの木を何本か束ねて、竹に括り付けて箒のようにして、それにホタルを絡めてとった。(MS)
- 増井には増井天神がある。(MS)
- 増井天神はもともと、月輪村の八坂神社がある場所に祭られていた。1602年に祭った。大萱新田(月輪村)に大萱の地所を分け与えた際(延宝4(1676)年)に、八坂神社のある場所も割譲された。そして、月輪の人々が京都の祇園から八坂の神様を八坂神社の地に連れてきたため、増井天神は八坂神社横の清水の社あたりに移ったようである。また、増井の田のあたりに小さな祠があり、それも天神を祭ったものであったかもしれない。(南大萱史など、MS・FH)
- その後、昭和40年代に住宅開発が始まった際に、天神を進行していたHさんが増井にある自分の土地に祠を立てた。それが現在の増井天神である。(MS)

- 増井天神以外にも、大萱には貴船神社や藤ヶ森神社などの萱野神社のお旅所の社がある。それぞれの社ごとに近所の人によって講が組まれており、社の維持管理に当たっている。増井天神だけには講がなく、Hさんが個人で世話をしていた。(MS)
- 各社の講は、時折講の祭神の本社に代表を派遣して、清水やお札をもらってきた。(MS)

44. 新ノ池「しんのいけ」

45. 堂山「どやま」

- 堂山「どやま」は、東山道を境にして4・5m高くなる所にあつて、地質が粘土質だった。その粘土を掘って、家の壁土にしていた。土を掘って平らになった場所を田にした (MS)
- 堂山は高台になっているので、「かえつぶり」が林立していた風景を覚えている。(MS)
- 「かえつぶり」とは、「かえしつるべ」がなまった言葉と思われる。野井戸の水をくみ上げるための装置である (図)。(MS)
- かえつぶりは一枚の田に一基ずつくらい設置されていた。(MS)
- 堂山のあたりは、野井戸とかえつぶりがあることによって、畑を田に変えることができた場所である。
- 堂山のように高台になっている一里山のあたりにもかえつぶりはあつたが、一里山の田には石拾大池系統の水路が張り巡らされており、水路から水が供給されるシステムになっていたため、かえつぶりは二・三基しかなかった。(TM)
- 堂山に続く月輪の高台には、上部の池から給水する水路があつたが、水路は今の島津製作所のあたりまでしか来ていなかった、高台の末端に当たる堂山では水路に頼らず水を確保する必要があつた。そのために設置されたのが野井戸とかえつぶりである。(MS)
- 野井戸の深さは場所によって異なる。斜面の下部だと浅くなり、上部に行けば行くほど深くなる。だいたい6～8mあつた。(MS)
- 野井戸は壺のような形状をしており、中は広いが口が狭く、口の直径1mほどであつた。(MS)
- かえつぶりの高さは、野井戸の深さや天秤の長さによって決まるが、おおむね3mほどの高さだつた。(MS)
- 斜面の下のかえつぶりの規模は小さく、斜面上部に設置されたかえつぶりは大きかつた。(MS)
- 月輪の高台にあつた畑から堂山の方向を見ていると、膳所方面から来た雨雲が近づいてきて堂山のかえつぶりに落雷していた風景を覚えている。(MS)
- 野井戸には人も牛も落ちた。一夏に1・2件そのような事故が起こつた。(MS)
- 野井戸に牛が落ちると、村中総出で救助した。野井戸の間口を広げて、中にはしごを入れて牛を助けた。(MS)
- 農繁期には水をくみ出すので、野井戸の中の貯水量は少なかつたが、秋になってくみ出しが終わると井戸の中に水がたつぷり溜まっていた。(MS)
- そのような中に人が落ちると、助からず、命を落とすことがあつた。(MS)

46. 湯ノ口「ゆのくち」

- 湯ノ口には、上酢子池（かみすしいけ）がある。上酢子池は、四ノ坪や五ノ坪にあつた条里田に水を供給していた。

47. 広野「ひろの」

- 広野の中央には狼川が流れている。
- 狼川より草津側の広野で病人が出たので救急車を呼んだら、草津市に所属するものが来たが、狼川より草津側であっても広野の地所は大津市であるため、管轄でないと言って帰ってしまったことがあった (FT)。
- 広野では、麻や綿などの繊維植物を多く栽培していた。(MS)

48. 山田「やまだ」

49. 三条ヶ町「さんじょうがまち」

50. 烏子「からすご」

- 烏子には、烏子池（からすごいけ）があったが現在は埋め立てられている。

51. 野々宮「ののみや」

- 明治の地租改正で、野々宮から地番がふられたので、野々宮の地所が一番地になった。(MS)
- 江戸中期に月輪が京都の商人によって開発されたときに、南大萱が地所を分けた。野々宮・烏子・三条ヶ町・湯ノ口、山田の低地は水の利が良いため、月輪に分けず、水を確保しにくく不便な現在の月輪自動車学校や近江鍛工がある高台を分けた。(MS)
- 国道一号や鉄道ができると、これらの道は盛り土をして作るため一種の堤防となり、野々宮などの場所は水気が多い田になった。(MS)

52. 葛原「くずはら」

53. 往還浦「おうかうら」

- 東海道筋は、「かいどう」「かいろ」と呼んでいた。(HT)
- 東海道筋の一里山の人たちは、春の祭の際の警固などの役職をしなかった。(HT)
- その理由は定かではないが、東海道線 (JR) や国道一号線を超える大変さを案じたからかもしれない。(TM)
- 「往還」という言葉を地名に使っている場所は、大津・草津・守山のあたりにはない。(TM)
- 一里山のあたりを往還浦と呼ぶ人は、90才以上の古老である。(TM)
- 石拾大池の水は、朝倉道沿いを往還浦の赤元側を流れて、東野まで行く。東野の中央を国道1号が通っている。国道1号の下をU字型に掘って、サイフォン方式で向こう側に水を渡していた。(TM)
- 上手から流れてきた水は、数か所で国道1号を超えた。(TM・FT・MS)

浅川	マンボ (低地だから)
長沢川	橋
南野	サイフォン
東野	サイフォン
新ノ池	マンボ (低地だから)
烏子	トンネル
大割 (八坂神社)	サイフォン
養老川	橋

- 高地から高地に水を渡す場所ではサイフォンを使い、高地から低地に水を流す場合はマン

ボを使っていた。(MS)

- 鉄道の線路を水が超える場所は3か所あった。(MS)

新ノ池

マンボ

三条ヶ町

マンボ

赤兀踏切

マンボ

- トンネルはコンクリート造りで円筒型をしており、マンボはレンガ造りで馬蹄型をしている。(MS)

54. 赤兀「あかはね」

- 資料によって、赤秃、赤穴などいろいろな書き方がなされている。(TM)
- 粘土質で赤土が多い地質だった。(TM)

55. 古朝倉「こあさくら」

- 当時民家があった場所は、旧東海道沿いと朝倉道沿いの往還浦と焼野の境目のあたりまでであった。(TM)
- 昭和39年に建った自分の家が、朝倉道沿いの上手の端であった。その後徐々に朝倉道の上方に宅地が拡大していった。(TM)

56. 茶屋窪「ちゃやくぼ」

- 茶屋窪は大萱の地所だが、茶屋窪池（埋め立てられ、現在は大津市消防局瀬田分団の敷地になっている）は隣の大江村のものである。(TM)
- 大江には、「茶屋」という小字がある。(TM)
- 茶屋窪は窪地で、牛が入れないくらい湿った場所だった。(TM)

57. 焼野「やけの」

- 長沢川の水は、長沢川の右岸、茶屋前や長尾に流した。左岸には流さなかった。左岸の焼野には、石拾大池の水を引いたが、長沢川よりの3か所くらいの田には水が届かなかった。そのような田には野井戸を掘り、水を確保した。(TM)
- 焼野のあたりは、石拾池と尉ヶ池からの田畑に配水することができたが、一番水が得にくい地域であった。一里山のあたりでは唯一のはねつぶり（堀井戸とかえしつるべ）があった。(TM)
- 昭和35・36年頃、焼野と新朝倉の境界が学園通りと交差するあたりまでしか家が建っていなかった。(TM)
- 焼野の田は段差が大きく、大人でも飛び降りるのを躊躇するほどの段差があった（現在の瀬田東小学校体育館の付近）。(TM)

58. 茶屋前「ちゃやまえ」

- 新林・長尾・茶屋前のあたりは長尾池の水を引水していた。(TM)
- 丸尾池は、上・中・下の三つがあるが、上丸尾池は月輪村の池である。中丸尾池・下丸尾池が大萱の池である。(TM)
- 月輪村の人たちは、上丸尾池のことを丸坊池（まるぼいけ）と呼ぶ。上丸尾池を大萱から月輪に分けた時に、月輪の人々が呼び方を変えたようである（月輪史）。(古川)
- 大萱の人たちは、丸坊池とは呼ばない。上丸尾池と呼ぶ。(TM)

59. 山ノ神「やまのかみ」

- 中丸尾池・下丸尾池の水は、丸尾・四反田・山ノ神に引かれる。(TM)

- 丸尾池からの水路は、山ノ神池の南西側の横を通過して、東海道上手側を流れて葛原と茶屋前の境で長沢川に合流する。(TM)
 - 昭和20年ころまで、野井戸の水を使っていた。(TM)
 - 野井戸の水を稲作に使わなくなってきたからは、野井戸に竹でできたもんどり(「うえ」と呼んでいた)を入れてドジョウつかみをした。夕方にもんどりを入れて朝引き上げるとドジョウが入っていた。(TM・FT・HR)
 - 桶とロープを使って、野井戸から人力で水をくみ上げた。(TM)
 - 「かえつぶり」は、「はねつぶり」とも呼んだ。(FT)
 - 東海道沿いの家は、道の湖側にある家のほとんどが本家で、山側にある家は分家である場合が多かった。(TM・SY)
 - 道の両側の家は、奥行きはほぼ同じであるが湖側の本家の屋敷のほうが間口が広がった。湖側の家のほうが屋敷が広がった。(TM・SY)
 - 湖側の屋敷の裏には裏道があった。朝倉道から長沢川に抜けることができた。(TM・SY)
 - 葛原より先は崖になっていたため裏道が付けられなかった。(TM)
60. 月ノ輪「つきのわ」
- 月輪池の名の由来について、月の輪が池に入ったことにちなむという言い伝えや、平安後期頃の公卿、九条兼実(月輪禪閣兼實)の荘園であったことによる、という説がある。
61. 四反田「したんだ」
62. 新朝倉「しんあさくら」
- 一ツ松と新朝倉は高台だが、その境は低くなっている。昭和18・19年ころ、その低地にトロッコで土を運び入れて、道路幅に埋め立てて工場建設のための道を作った。(TM・SY)
 - 新朝倉には、梨畑が4か所あった。面積が1〜2反ある広い畑だった。場所は、学園通りの坂を上がって右手、バイパスの下のあたり(小字は石拾ノ内)や学園通りの道沿いである。(TM・SY)
 - 梨畑以外の場所では米を作っていた。(TM)
 - 学園通り(朝倉道)の古い写真がある。(古川)
 - TM家は、東海道と朝倉道の交差点にある家が本家である。父の代の時に今の場所に分家した。(TM)
 - 分家の長男の兵役を逃れるために、名字を変えた家もある。(TM)
 - 石拾池の水を朝倉道沿いに流し、さらに両脇に分水して水を配分した(この水路を「よみぞ」と呼んでいた)。(TM)
63. 一ツ松「ひとつまつ」
- 茶屋窪と比べると高台になっている。(TM)
 - 昭和20年頃、現在の東レ瀬田工場の地にあった三井精機を軍需目的のために一ツ松に移転する計画がたてられ、まず寮を建設したが、メインの工場を建築する前に終戦となったため、工場の移転計画はなくなった。(TM)
64. 長尾「ながお」
65. 丸尾「まるお」
66. 新林「しんばやし」
67. 石拾「いしひろ」

- ・南大萱では最も面積が広い小字であり、松林と雑木林が広がっていた。(TM)
- ・南大萱では南方に位置し、最も標高が高い(琵琶湖の水面より約100m高い)。(TM)
- ・奈良時代の製鉄遺跡である源内峠遺跡がある。(TM)

68. 石拾の内「いしひろのうち」

- ・石拾池は、大池(おいけ)と呼んでいた。(MS)
- ・石拾池は、南大萱で一番大きく、一番新しい池である。作った際の文書が残っており、これについては南大萱史に載っている。
- ・下長尾池の横には地蔵の祠があり、8月23日に雨ごいの儀式を行う。地蔵盆の頃である。
- ・雨乞いの儀式は、村の四役(区長・北学区の副区長・東学区の副区長・一里山連合会長)と寺で行う。
- ・南大萱の5寺が持ち回りで担当する。
- ・雨乞いの地蔵は、5年ほど前に盗難にあったけれども戻ってきた。

69. 熊ヶ谷「くまがだに」

- ・南大萱の最も南に位置し、上田上と大江地先に挟まれた土地である。地元では「村山(むらやま)」と呼び、村の共有地があった。一部には個人所有の土地もあった。冬になると雑木や木の葉(松葉や雑木の葉)を各自持ち帰った。(TM)

6. その他さまざまな事柄

■ 池や湖についての思い出(主にMS・FT・SY)

- ・南大萱では、上酢子池・下酢子池・烏子池・本願明池・月輪大池の利用権が入札対象であった。他の池では養殖が行われなかったため、入札もなかった。
- ・養殖する池では、5月にコイの稚魚を入れた。稚魚は11・12月頃までに成魚になった。
- ・11・12月に池の水を落とし、魚を収穫した。とった魚は、一般の人や魚やに販売した。
- ・コイ以外に、フナ・川エビ・ボテジャコなどが取れた。これらの雑魚は、琵琶湖から遡上して池に入ったものだったのだろう。
- ・池での魚の養殖は博打のようだった。日照りだと池の水は水田に優先的に利用されるため池の水がなくなってしまうし、逆に雨天が続くと池が増水すると魚が逃げってしまった。
- ・養殖魚の餌として、蚕のさなぎを入れていた。さなぎは外から買ってきていた。
- ・魚のアラや古米も餌としていた。
- ・ため池ではよく泳いだ。一里山の子供は石拾池で、大萱の子は上酢子池と浜(小葎と蓮原の間のあたり)で泳いだ。浜は遠浅で泳ぎやすかった。
- ・小学校くらいまでの幼児は、「だんご橋」のある所で泳いだ。
- ・もう少し大きくなって小学校低学年くらいまでの子供は、浜で泳いだ。
- ・小学校高学年くらいになると、下酢子池で泳いだ。
- ・琵琶湖で泳ぐよりも、池で泳ぐ方が危険だった。
- ・小学校高学年になると、浜から対岸の御殿が浜まで遠泳した。漁船が並走してくれた。途中、砂が堆積して立って休めるところが三か所あった。
- ・南郷洗堰が放水しているときには流れが速くなるので湖では泳がなかった。
- ・良い家の子や一人っ子は大切にされていたので泳がなかった。
- ・下酢子池では青年団の水泳大会が行われた。

- 泳ぐときには、ふんどしも締めずに裸で泳いだ。
 - 唐橋での水泳については、国民学校の日記に書いてある。
 - 唐橋の蕎麦屋の前あたりに水泳場があった。
 - 同じ小学校の橋本の子供たちが、唐橋から飛び込めることを自慢するので、小学校高学年になると唐橋まで遠征し、唐橋から飛び込んだ。
 - 唐橋のある場所で、瀬田川を泳いで横断しようとした。中の島を目指すのだけれども、螢谷のあたりまで流されてしまった。
 - 泳ぎに行ったら貝などを採ってきた。
 - 姥田川の河口のあたりを「江口」と呼んでいたが、江口と船溜まりの間のあたりでカラス貝・ドブ貝・シジミ貝を採った。
 - 他にも畑のトマトやスイカなどを採って食べてしまっていた。
 - 石山に行くのに、瀬田川に架かる線路を渡って近道をした。(YK)
 - 瀬田川で泳いでいるのを、列車に乗っていた母屋の兄に見られて、怒られた。(FT)
- 山についての思い出
- 山は、金持ちの個人が集落近くの森の口のあたりを所有していた。(MS)
 - 熊ヶ谷のあたりは村山で共同で利用していた。(MS)
 - 雑木を芝刈りし、下刈りしたものを束にした。(MS)
 - 松の落ち葉を木の葉かきした。集めた葉は燃料として利用した。(MS)
 - 山に行くときには、大八車を引いていった。(YK)
 - 大八車を引くときには、子供は「はなびき」(車にロープをつけてそのロープを引くこと)をした。(YK)
 - 大八車の舵を取ながら「れんじゃく」をたすき掛けにして車を引いた。(MS・YK・HT・FT)
 - 医大のあたりに、マツタケやイグチをとりにいった。イグチはぬるっとした黄土色のキノコである。(YK)
 - 山に生えていたのは主に松であった。
 - 瀬田丘陵では、田上側のあたりで良くマツタケが取れた。
 - 村山では、誰でもキノコを採ることができた。入札などはしなかった。
 - このはかきや芝刈りは、冬の間の仕事で、11・12月ごろから2月頃までの期間に行った。
 - マツタケは決まったところでしか生えなかった。
 - 鉄の残渣の「けら」が山には落ちていた。
 - 源内峠遺跡の東側付近を金糞谷(かなくそだに)と呼ぶ、と聞いたことがある。(TM)
- 長沢川について
- 長沢川の堤防が決壊する場所はだいたい決まっており、長沢川の蛇行が始まる増井のあたりか、蛇行がおわる藤ヶ森のあたりだった。(MS)
 - 決壊の原因は蛇行だけでなく、増井や藤ヶ森には橋が架かっていたので、増水によって上流から流れてきた木などが橋に溜まり、一時的な堰になってしまうからでもあった。(MS)
 - 南川崎・総鯨のあたりは堤はほぼなく、川が蛇行するに任せるような場所だった。なので、畑にしかならなかった。(MS)
 - 長沢川は天井川であったので、堤防が決壊すると水があふれるだけでなく、川底に溜まり

天井川の基礎となっている大量の土砂も流出するため、被害は甚大だった。(MS)

- 記憶にある限り、在所側の堤防が切れたことはない。北側の、農地側の堤防が切れた。狼川を挟んで大萱の北側に隣接する南笠村では、狼川の南側の堤防が切れ、在所側に水が流れ込んだことはなかった。もしかしたらこれは、在所を守るために農地側の堤防を人為的に切っていたのかもしれない。(MS)
- 長沢川には、針田・藤ヶ森・増井の三か所に石の橋が架かっていた。(MS)
- 石の橋は、幅40-50cm、厚み30cmほどの石材が何本か並べられてつくられていた。全体の幅は約1間で、大八車やリヤカー、トラックが通れるくらいの幅だった。針田の橋はコンクリートだった。(MS・SY)
- 三か所以外の場所には、人が歩いて渡れるだけの一本橋がかかっていた。荷を運ぶために天秤棒を担いで橋を渡った。(MS)
- 鉄道の線路は盛り土の上に置かれていた。盛り土の高さと長沢川の高さがほとんど同じだったので、長沢川には鉄道のトンネルはなかった。(MS)
- 狼川や草津川は、天井川天井の高さがとても高く、鉄道は川底の下に穿たれたトンネルをくぐっていた。(MS)
- 長沢川の堤防には、堤を補強するために竹・松・雑木が植えられていた。(MS・TM)

■ 田の水の管理

- 池の管理は、大萱の区長が代表になって村で管理していた。(MS)
- 水利委員を出す家はだいたい決まっており、一里山の場合は彦次郎、一郎兵衛、儀衛門(全て屋号)の家が担当していた。(TM)
- 水入れ「みずいれ」役の人が水を出し入れする作業をしていた。(MS)
- 子供のころ、下丸尾池の下にあった自分の家の田に水を入れるために、池の底にある水栓を夜中に抜いて水を盗んだ。(FT)
- 増井あたりの石拾池系統の田は、正方形に近く、広さも一反より広がった。(MS)
- 水系によって田の形が違う。(MS)
- 条理田が長方形なのは、道と水路の間に一反の広さの田を配置するために長方形になったのではないか。(MS)
- 田の面積が広がると、田を水平に保ち水の管理をするのが難しくなる。
- 山手の池の築堤年代はわかるが、下手の池が作られた年代はわからない。
- 酢子池などは地形を生かして作られている。平地の池は四方に築堤する必要があるが、酢子池は地形を生かして四方に堤を作らなくてもよい場所にある。(MS)
- 昭和60年ころ、上酢子池と下酢子池の間の道は今よりも広がった。(FH)
- 狼川を挟んで隣にある南笠村の人たちが、明治期に道を補強する石代を出資してくれたという書類が残っている。(MS)

■ 南大萱のお寺について (ほぼMS)

- 南大萱の在所には、東光寺・善念寺(1493年開基)、通徳寺(1608年開基)、常楽寺(1602年開基)、萬福寺(1508年開基)の5つの寺がある。
- 東光寺は曹洞宗、常楽寺は浄土宗、善念寺・通徳寺・萬福寺は真宗大谷派である。
- 南大萱の人たちがこれらの寺の檀家になっているが、南大萱から分村した新浜も人たちも、善念寺の檀家になっている。

- 善念寺は、「連」姓のほとんどと「松田」姓の一部が檀家である。
 - 通徳寺は、「阪口」「坂口」姓のほとんどと、「松田」姓の一部が檀家である。「松田」姓は通徳寺の檀家になっている家が最も多い。裕福な檀家が多く、釣鐘が最も早い時期にできた。
 - 常楽寺は、「松尾」姓と「MS」姓の一部が檀家になっている。
 - 萬福寺は「本郷」姓のすべてと、「松田」「深田」「田中」「高橋」姓が檀家になっている。
 - 南大萱は集落の規模が近隣の村と比較しても大きく、人口が多かったので、在所内での婚姻関係を持つことができた。
 - 本家は、所属する寺のすぐ近くにある。分家や家移りをするると寺から物理的距離が離れることになるが、寺は変わらないので、村内に檀家が散在することになった。
 - 寺は檀家からの寄付によって経営されているため、檀家持つ田の場所の影響を寺はうける。
 - 一族によって持っている田の場所に傾向があった。たとえば、本郷家は村内のいろいろな場所に田を持っていた。松田は条理田や浜近くの低地に田を多く持っていた・
 - 松田家の持つ条理田や低地の田は、天候が良ければ取れ高は非常によかったが、大水が出て田が浸水すると収量が激減する場所だった。そのため一家全体の年あたりの豊作と不作の差が激しかった。
 - 本郷家の田は様々な条件下にあったので、雨量が多い年に低地の田の収量が低かったとしても高台の田で高い収量を上げることができたので、毎年の取れ高に変動は少なかった。
- 大割「おおわり」での農業
- 月輪村の国道1号と堂山の間のエリアは、大割という小字である。(MS)
 - 月輪村の地所であるが、土地は大萱の人が所有しており耕作していた。(MS)
 - 大溝の畑の特徴は、作物の種類が良く変わることである。大萱の他の耕地と比べると、作付されるものが良く変わった。大萱の他の場所の耕作はほとんど変わらず、水稻の栽培だった。(MS)
 - もともとは大根などの普通の野菜を作る畑だった。(MS)
 - それで、サツマイモ・梨・茶の畑に変わっていった。(MS)
 - 梨畑では、養蜂も行われていた。おそらく、受粉を助けるのが主な目的だったのではないか。(MS)
 - 茶は、商品作物として栽培していたが、戦時中の頃から自家用に栽培規模が縮小した。茶畑だった場所は芋畑に変わっていった。(MS)
 - 茶から芋への置換は、収量や収入が芋のほうが良かったからなのか、あるいは戦時中という時勢の影響なのかはわからない。(MS)
 - 養蜂や作物の転換などの新しい知識は、草津の農学校で学んだ人が当時最新の知識を導入したからではないか。(MS)
 - 草津の農学校は、湖南(栗太郡)地域のエリートを輩出する学校だった。(MS)
 - 各村の優秀な子供が1・2人入学していた。村々から万遍なく学生を集めるシステムだった。(MS)
 - 水田に向かない等級の低い13番田などは、都市化や戦争や農学校からの新知識などの影響を反映しやすく、世相に合わせて姿を変えていった。(MS)
 - 引水が容易な高い等級の一番田は、世相の影響を受けにくく、田地の姿はなかなか変わらなかった。(MS)

■ 南大萱での繊維産業

- ・綿栽培は徐々に衰退し、麻に置き換わっていった。(MS)
- ・麻は販売用に栽培していた。(MS)
- ・綿の栽培は販売用でなく、自家で用いるためだった。(MS)
- ・打綿までの種取りなどはそれぞれ個人の家で行った。打綿は、下準備が終わったものを数軒でまとめて打綿屋に持っていき、綿を打ってもらった。(MS)
- ・打綿屋は月輪にあった。(MS)
- ・数軒まとめて打綿することで、各家の綿の特徴が混じり合い良い綿になったのではないか。(MS)
- ・打綿の後の糸紡ぎ・機織り・仕立てなどの作業は、また個人で行った。(MS)
- ・自分たち作った綿の量は、必要な量の数割だった。不足分は撚り終わった糸を購入した。(MS)
- ・機織りは戦後衰退し、昭和30年代で終わった。(MS)

■ 南大萱の結婚について

- ・結婚して村から出るときに、近所の人に「ねえちゃんは、おおがいのかみさんにみはなされたなあ」と言われた。(YK)
- ・昭和30年ころまで、南大萱では在所の中で通婚されており、村の人と村外の人が結婚することはほとんどなかった。(YK・OS・HT)
- ・東レができてから南大萱の結婚模様は変わった。昭和27～28年頃、大萱の男と東レの女工さんの心中事件があった。それまでは結婚は村内の人とすることが南大萱の常識であったが、事件以降村外の人と結婚することも許されるようになった。(YK・OS・HT)
- ・外との結婚の際には、相手の身元を調べに行った。(YK)
- ・他の地域と比べて、大萱は言葉が荒いイメージがある。瀬田の橋本は漁師が多く、気質の荒い人が多いイメージがある。(YK)
- ・南大萱の商店 (YK・OS・HT)
- ・村に商店街のようなことはなく、在所の中に点々と商店があった。

■ 仕出し屋：魚留（浜街道に店が残っている）・米駒・奥治または奥継

- ・油屋：菜種油を絞っていた。浜街道の魚留の向かい、現在はガソリンスタンド
- ・肥料屋：藤ヶ森神社のあたり、現在自動販売機が並んでいるあたりにあった。
- ・醤油屋：浜源
- ・酒屋：酒弥、奥治の向かい
鍛冶屋：魚留さんの県道を挟んで向かい
桶屋：芦浦街道沿い
医者：四辻、お地蔵さんの向かい、現在は駐車場になっている
産婆さん：小島さん（浜源さんの向かい）、松田さん、浜の産婆さん（浜街道の魚留の向かい）。浜の産婆さんはHTさんのおばさんがやっていた。当時、浜街道は舗装されていなかったので砂埃がひどかった。産婆のおばさんの家の道路側の障子は、一枠が紙張りではなくガラスがはめ込んであった。浜街道を車が通ると、そのガラスの枠から外を覗いて車が通るのを眺めた。おばさんの家で麦ごはんがよく出たが、それを自分ではしじみごはんと呼んで食べていた。産婆のおばさんの家には4歳年上のいとこのお姉さんがいて、「長張」

を持って勉強をしていた。

- 髪結いさん：丸虎（北出）
 - 鮎屋：あめ竹（ひかり保育園の所）
 - 上記以外にもたくさんの商店があった。
- 一里山の商店（TM）
- 一里山には日常生活に必要なものを商う店があった。豆腐・醤油・下駄・昆布・駄菓子・酒・桶・石を商う店に加えて、鍛冶屋・大工・左官屋があった。世帯数が80軒であった昭和10年頃には、お店は16軒あった。これらの店は旧東海道沿いにあった。